黄道婆とその時代の染織

竹　垣　惠　子

1.　はじめに

本報告は「平成 11 年度　塚本英世記念国際交流計画による海外研修員」の研究補助金を得て、「黄道婆とその時代の染織」を課題に、1999 年 8 月から翌 2000 年 2 月までの 6 ヶ月間、中華人民共和国・上海において行った研究調査の一部をなすものである。

本研究への経緯は、1994 年度から 1997 年度までの 4 ヵ年間、「私立大学経常費補助金特別補助による、特色ある教育の推進『木綿文化の研究』」（代表者　井関和代）に研究員として参加した事に起因する。この 4 年間の研究期間に、報告者に課せられた研究課題のひとつが中国の「木綿紡績研究」を行うことであった。そして、この研究を進めるうちに、宋、元時代の技術的功績者として「黄道婆（*Huangdaopo*）の存在を知ることとなり、その研究に着手することとなった。だが、わが国では「黄道婆」及び中国の木綿文化に関する文献資料の入手が困難であったため、資料のほとんどが入手できずにあった。

そこで中国における研究調査は、中国の膨大な染織史の中から、特に伝説化した「黄道婆」に焦点をしぼり、彼女の活躍したとされる、宋、元時代の社会状況、染織技術の発展とその背景を明らかにすることを研究目的とした。

尚、現地における聞き取り調査は中国語で行った。また、本報告を作成するにあたっては、現在中国で使用されている漢字を、日本漢字に変換した。しかし、変換不可能な漢字については、(　) としてわが国の用語を記述した。

2.　黄道婆に関する一般説

「黄道婆」は中国染織史上において、宋、元時代に木綿の栽培の推進と紡績機具の改良を行った「木綿紡績技術の革新者」とされているが、その生い立ちや生没年は不詳な人物である。そのため彼女の生涯に関しては諸説が存在する。しかし、ひろく一般に知られている黄道婆説では、およそ宋時代末期から元時代初期（1270 年頃）、江南地方の江蘇松江「烏泥涇」（*Wunijing*）」（現上海県）に生れたとされている。彼女は幼少時に中国封建社会の慣習であった幼児婚制度「童養媳（*tongyangxi*）[1]」によって幼妻となった。しかし幼くして嫁いだ家で、姑と夫の虐待に会いながら成長した彼女は、ついには婚家を出て「崖州（*Yazhou*）」（現在の海南島）に逃れたという。彼女の育った中国・江南地方は、当時、木綿布の製作が未発達な段階であったが、彼女の逃れた海南島では、すでにその生産が盛んに行われていた。黄道婆は、この地で黎族（*lizu*）からワタ（棉　*mian*　学名　Gossypium arboreum　以降、木綿と記述する）の栽培から収穫された綿実からワタ繊維を採り、「綿打ち」、「糸紡ぎ」、「製織」までの全工程を習得したとされる。晩年になって上海へ帰郷し、これらの技術を人々に伝え、故郷の綿織物の紡績技術を大きく発展促進させたという。［史伯奎 1984：117］

当時の中国の織物状況について、元時代末期（西暦1400年頃）に陶宗儀（*Tao Zongyi*）が著した『輟耕録（*chuogenglu*）[2]』には、「（現在の福建省・広東省地域である）閩広（*Minguang*）ではすでに木綿を栽培して（初

原的技術ながら)、＜吉貝（*jibei*）[3]＞と呼ばれる木綿織物が存在した。しかし黄道婆の故郷、松江府の東部に位置した烏泥涇は、土地が痩せていたために非常に貧しく、人々は日々の食料を確保することすら困難であった」[朱士充　王孝俭　1994：209～210（　）は報告者追記。]と記されている。当時の中国本土で用いられていた木綿用の紡績具は、未だ初原的技法の段階にあり、木綿布製作の要となる「綿繰り機」も存在せず、採集した綿実から綿毛と種を区分する作業も指先による摘綿によって行われていた。そのワタをほぐす作業も簡単な竹製の弓に糸を張っただけでのもので、極めて効率の低いものであった。このような状況にあって、元時代の元貞年間（1295～1297）に、上海・松江に帰郷したとされる黄道婆が、海南島で学んだ紡績工具・技術を故郷の人々に伝え、また旧来の工具に革新化を行ったという。[田自秉 1985：269]

これらの説話によると、採り入れた綿実から種を取り除く「撹車（*jiaoche*）[4]」（綿繰り機）（図 1・写真 1）、また、摘綿したワタをほぐすための綿打ち用の「椎弓（*chuigong*）」（綿弓）（図 2）、そして、ワタから糸に紡ぐ「糸車」である「三錠脚踏紡車（*sandingjiaotafangche*）」（足踏み式の糸紡車。）（写真 3・図 4）など、紡績から織りまで全工程の道具の改良を行ったとされている。[田自秉 1985：270]

特にほぐしたワタから細くひき出した紐状のワタに、撚りをかけて糸にする方法が、当時の上海、松江地方では、手動で回転させる「糸撚り機」であったものを、脚力で行うように工夫した「三錠脚踏紡車」を同地方に導入した結果、糸に撚りをかける糸錘棒の回転速度が増し、また、回転動力を脚部としたことによって、両手の使用を可能とし、同時に 3 本の糸を撚ることができるようになり、多量の木綿糸を作り出すこととなった。

さらに、経糸を一気に開口させる綜絖の導入は、生産効率をあげることになった。また、この「綜絖」装置を後に改良して、「文織」へと発展させていった。また、織り上がった木綿布は衣料や、特に掛け布団、敷き布団用の布に使用された。特に寝具用の木綿布には、折枝（*zhezhi*）（図 5）・団鳳（*tuanfeng*）（図 6）・棋局（*qiju*）（図 7）・字様（*ziyang*）（図 8）の美しい文様がほどこされた。人々は黄道婆によって伝えられた道具と工芸的手法によって文様布を織り出し、これを販売して生計をたてることができるようになったという。[田自秉 1985：270]

以上が中国において伝承されている黄道婆の人物とその功績である。しかし、黄道婆が一般庶民階層の女性であったために、彼女個人の詳しい記述については記録されていない。

「黄道婆」という文字が出現する最も古い文献は、前述の陶宗儀が著した『輟耕録』と、王逢（*Wang Feng*）が著した『梧渓集（*wuxiji*）』の中に記されている「黄道婆祠（*Huandaopo Ci*）」である。[朱士充　王孝俭　1994：209～210] これらの資料の入手が困難であることを鑑みて、以下にその本文を紹介しておくことにする。

・陶宗儀：『輟耕録』巻二四

闽广多种木棉，纺绩为布。名曰吉贝。松江府东去五十里许，曰乌泥泾，其地土田硗瘦，民食不给，因谋树艺，以资生业，遂觅种于彼。初无踏车，椎弓之制，率用手剖去子，线弦竹孤，置案间，振掉成剂，厥功甚艰。国初时，有一妪名黄道婆者，自崖州来。乃教以做造捍，弹，纺，织之具。至于错纱，配色，综线，挈花，各有其法。以故织成被，褥，带，帨，其上折枝，团凤，棋局，字样，粲然若写。人既受教，竞相作为，转货他群，家既就殷。未几，妪卒，莫不感恩洒泣而共葬之。又为立祠，岁时享之。越三十年，祠毁。乡人赵愚轩重立。今祠复毁，无人为之创建。黄道婆之名，曰渐泯灭无闻矣。

・王逢：『梧渓集』巻三　「黄道婆祠」

黄道婆、松之乌泾人。少沦落崖州，元元贞年间，始遇海舶以归。躬纺木棉花，织崖州被自给。教他姓妇，不少倦。未几，被更乌泾名天下，仰食者千余家。及卒、乡长者赵如圭、为立祠香火庵、后兵毁、至正壬寅、张君守中迁祠于其祖都水公神道南隙地、俾复祀享。且征逢诗、传将来。辞曰：

前闻黄四娘，后称宋五嫂。

道婆异流辈，不肯崖州老。

崖州布被五色缫、组雾训云灿花草。
片帆鲸海得风归、千轴乌泾夺天造。
天孙漫司巧、仅解制牛衣。
邹母真及贤、训儿喻断机。
道婆遗爱在桑梓，道婆有志覆赤子。
荒哉唐元万乘君，终腼长衾共昆弟。
赵翁立祠兵火毁，张君慨然断绝祀。
我歌落叶秋声里，薄功厚飨当愧死。
訳は本報告文中に使用しているので省略する。

両著者は共に元時代末期から明時代初期の人物である。この両著のほかに、筆者が現地で採集した民間説話には異なった内容のものが数多くあった。しかし、いずれも彼女の功績に関する説話は共通した内容であった。

この理由として考えられることは、紹介した両文献に記述された黄道婆の功績は共通しているが、その出生の情報に関しては微妙に異なっている。具体的に挙げると、陶宗儀の『輟耕録』では、[有一妪名黄道婆者，自崖州来(訳：海南島からやって来た黄道婆という女性がいた)] という曖昧な表現に対して、王逢の『梧渓集』では、[黄道婆、松之乌泾人（訳：黄道婆は松江の烏泥涇のひとである。)] とある。この両文献をもとに後世に記述された「黄道婆」資料が引用を重ねるうちに、つまり俗にいう「孫引き」の都度に出生の部分に加筆がなされて、巷間に伝わったのではないかと筆者は考えている。また、このような技術革新について、別途に伝わった技術・道具の移入を一人の女性に集約したのではないかと推測するのである。これについては、後頁に今一度の考察を行うことにしたい。

いずれにせよ、宋時代中期までは、一般の人々の衣料は麻・葛であり、限られた人々のみが絹を使用していたが、木綿の種と共に紡績技術も伝わった後には、それまでの繊維素材とは異なる柔らかで保温性に優れた木綿を一般の人々までが、衣料や寝具に使用できるようになった。

また、元時代初期になると政府が「木綿提挙司(*mumiantijusi*)」を設立し、木綿布を税として徴収することとなり、木綿の需要と紡績技術の伝播は加速していった。このように木綿織物の生産効率が求められるようになった。そして、これまでの麻・葛・絹といった長い繊維を糸にする技術から、短い繊維である木綿を糸にするために、従来の紡績工具の改良に努めた人物として「黄道婆」は登場した。

多くの説話の中で、彼女の伝えた技法で作られた布は、中国国内の多くの人々に受け入れられたとされている。木綿織物を副業としている一般庶民階層の女性の生活を、経済的・精神的に豊かにした「恩人」として人々に語り継がれ、時を経て神格化に至ったのではないかと筆者は考える。そして、現在でも松江で作られた黄道婆ゆかりの織物製品の商品名を見ることができる。以下はその商品名である。

烏泥涇被　(*Wunijingbei*)
精線綾　(*Jingxianling*)
三梭布　(*Sansuobu*)
勇線毯　(*Yongxiantan*)

どのような商品であったか、筆者には不明であるが文字からみると、烏泥涇被を布団用の布、他の３点は、組織織りによる布のことではないかと推察する。今後再度調査をする予定である。

写真１　「撹車」中国　上海・松江博物館
撮影　筆者

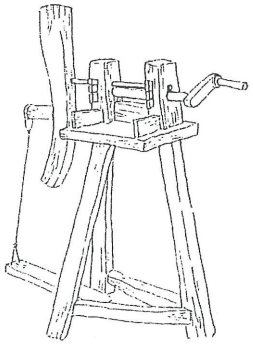

図１　「撹車」中国
『黄道婆研究』より

図３　「唐弓」日本
『機織彙篇』より

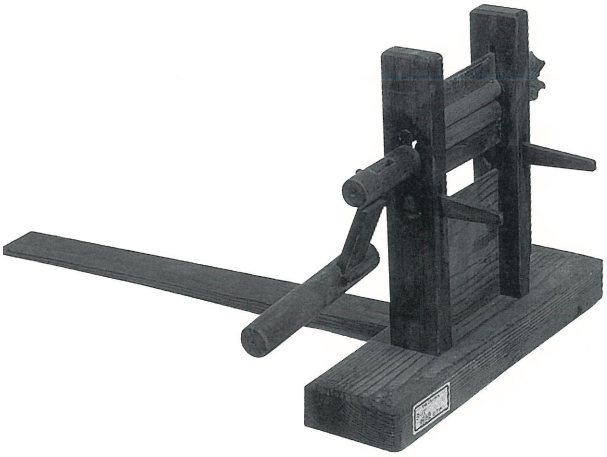

写真２　「撹車」日本
『大阪芸大資料集木綿文化』より

写真３　「三錠脚踏紡車」中国　上海・松江博物館
撮影　筆者

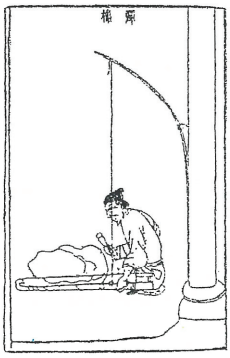

図２　「椎弓」　中国
『天工開物』」より

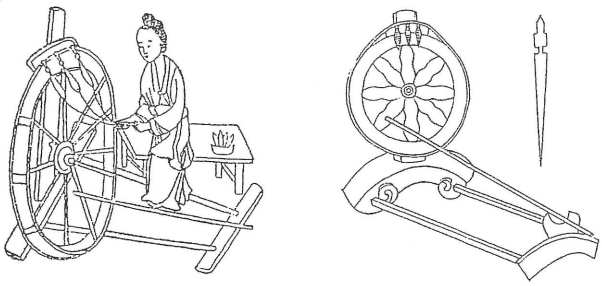

図４　「三錠脚踏紡車」中国
『黄道婆研究』より

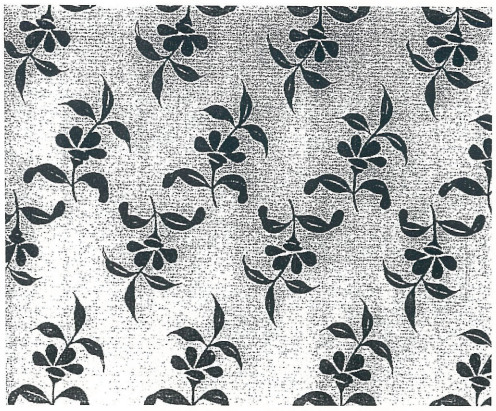

図５　折枝

図６　団鳳

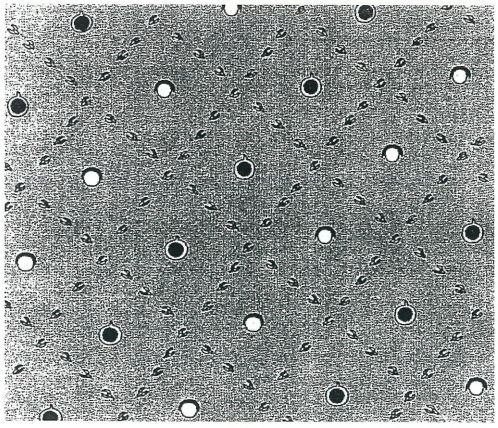

図７　棋局

図８　字様

3.　宋・元時代の綿紡績略史と黄道婆

3−1　略史

前項で記述してきたように「黄道婆」の名前は、現在の中国にあっても高名な伝説の人物である。しかし、その存在には多くの謎がある。そこで、中国綿紡績史上に、何故、一人の女性の功績として「黄道婆」が登場し、また民間において神格化されていったのかを探るために、本項では宋・元時代の綿紡績略史を紹介する。

さて中国では、中国南部、東南部と西北部国境が、比較的早く（漢時代以前）ワタの栽培とその紡績技術が発展した地域であるとされている。

宋代から明代にかけて木綿は人々の衣料として主要な原料となり、また綿紡績業は国民経済において、農業に次ぐ位置を占めるようになった。

木綿は、南方と北方のルートを経て中原（黄河の中流、下流地域。河南の大部分と山東西部及び、河北・山西南部を含む地域）まで伝播したと考えられている。南方ルートでは、海南島・攔滄江（*Lancanjiang*）流域がもっとも早く木綿が出現し、その後、福建、広東、四川等の地域に広まり、北方ルートは西北地域（陝西・甘粛・青海・寧夏及び、内蒙古西部）から始まり、13 世紀にはいると、すでに陝西の渭河（*WeiHe*）流域まで広まり、元時代初期には、「木綿提挙司」が設立され、綿布は国に収める税の対象にまでなっていった。［赵文榜　黄国梁 1984：362］

そして、黄道婆の生きたとされる、宋・元時代は木綿布が急速に普及した時期である。また、木綿布が政府によって、納税品と定められるようになったこととあいまって、人々にとって紡績技術の効率も重要な問題となった。

3－2　黄道婆碑について

上海市内に、現在でも黄道婆を紀念する場所や、彼女を奉る廟が各所にある。しかし、特に弄堂（*longtang*）[5]の中に奉られている廟は、近年の区画整理などでなくなった例も少なくない。以下は筆者が取材した黄道婆の功績を讃える場所のいくつかである。

（すべて、指定重要文化財）

得月楼は、清時代の上海布業公所の活動場所であった。：豫園庭園内

現在は国賓を接待する場として使用されているため、一般人の入場は許可されていない。筆者は、上海国際友好都市交流事業発展基金会のご好意により、見学の機会を得たが、写真撮影は許可されなかった。

得月楼には、以下の対聯[6]（対句）がある。

上联：姆教千秋、惠我生涯杈子母
　拙訳　黄道婆の教えは、絶えることなく子々孫々まで伝えよう

下联：婆心一片、得兹秘授说丁娘
　慈悲にあふれた心で、丁娘のように優れた技術を授けてくれた

　注：丁娘＝女神

更に落款は以下のように記されている。

光绪二十三年四月初六黄道婆生日布衣业　商人敬祝
　拙訳　光緒23年農暦4月6日、黄道婆の生誕を敬意と共に祝す
　　布衣業商人

この対聯から清時代には、黄道婆の誕生日である農歴の四月六日に、上海の人々が、彼女への感謝を込めて、その誕生を祝うために、毎年同月同日に集い、得月楼は大変賑わったと伝えられている。

　注：農暦＝陰暦

黄道婆紀念堂：上海植物園内　北東部

上海県龍華郷南郊村に1730年に「黄母祠」として建てられた紀念堂である。建築様式は江南地方の伝統的な農家の「四合院式」であり、1960年に修復がなされた。その後、文化大革命の関係で損壊された。しかし、黄道婆の功績を讃えて、1981年、黄母祠を上海植物園に移転し、再修復して黄道婆紀念堂とされた。（写真4・5・6）

黄道婆墳墓：行政区画改変を繰り返した為、現在は上海県徐匯（*xuhui*）区、旧上海県龍華郷（*longhuaxiang*）華涇鎮（*huajingzhen*）（写真7・8・9）

この墓へは『黄道婆研究』［上海県文化局・上海県誌弁公室編　1994］の副編集長である张乃清、執筆者の一人である魏德明両氏に案内していただき、黄道婆墳墓に参拝する機会を得た。現在も黄道婆墳墓を守るために、老夫婦が墳墓脇近くに住んでいる。

写真4　黄道婆紀念堂　全景
撮影　魏德明

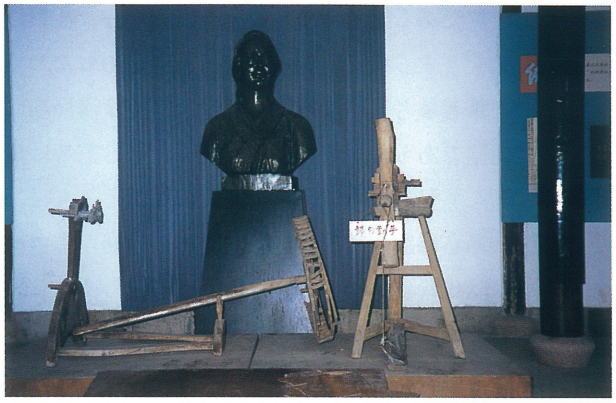

写真５　黄道婆紀念堂内　黄道婆の塑像とその工具
撮影　報告者

写真６　黄道婆紀念堂　入り口付近
撮影　報告者

写真７　黄道婆墳墓
撮影　報告者

写真８　黄道婆墳墓前門
撮影　報告者

写真９　黄道婆墳墓全景
撮影　報告者

4. 考　察

このように、上海市内いたる所で見受けられる「黄道婆碑」などの資料を通じて、本項ではまず、中国染織学界において「黄道婆」の謎とされている幾つかを挙げた後に、筆者の考察を述べることにする。

4−1　名前について

「黄道婆」または、「黄婆（*HuangPo*）」、・「黄母（*HuangMu*）」とも言われる。彼女の実名に関しては、多くの人々が疑問をもち、歴史的背景、民族的背景など、各方面から論じている。たとえば

1、彼女は貧困ため、幼い頃「童養媳」という中国封建社会の慣習により労働力として、他家へ売られ、

その家の息子の成長を待って結婚したことから 、「黄」という姓は嫁ぎ先の姓である。

2、嫁ぎ先の姓は「顧（*Gu*）」であり、「黄」は彼女の実家の姓である。

3、黄道婆は捨て子であり、赤土や黄土の泥の道という意の「黄泥路（*huangnilu*）」で拾われてきたので「黄道」はこのことから由来している。

とある。［姜銘 1994：61］

そこで筆者は、これらの説話を基にして「黄」「道」「婆」という文字の意味から推測を試みた。まず、「黄（*huang*）」は君主を意味する「皇（*huang*）」と同じ発音である。

次に、「黄婆」は年配の女性道士（道教の僧）の意味がある。［姜銘 1994：62］

そして、「道婆」は、もともと修養を積んだ年齢の高い女性に対する尊称として使われていた。若い女性道士の事は「道姑（*daogu*）」という。［姜銘 1994：62］

さらに辞書を開いてみると、「黄道」は、天文学の黄道という意味の他に、「黄道黒道（*huangdao heidao*）」という吉日と凶日を意味することばとされていた。このことから、黄道は吉日を意味し、吉祥の意味を含むと思われる。

筆者は、これらのうち「文字」から、黄道婆という名前について、人々の暮らしを豊かにした女性への感謝を込めて創作された、名のない女性への尊称ではないかと考えている。

4ー2　出生地と漢民族について

黄道婆の出身については二つの説がある。もっとも一般的な説は、すでに述べてきたように、上海・松江府・烏泥涇の人であるという説である。（漢民族説）他の一つが海南島の出身を根拠とする黎族説である。

黄道婆が活躍した当時、木綿布製織の最先端の技術を保持していたのは黎族である。そして、当時の中国を支配していたのが蒙古族である。誇り高い漢民族にとって、蒙古族の支配下にあることが屈辱的であった上に、自分たちより下位であると考えている少数民族から、織布技術を導入したとするには、さらなる抵抗感があったのではないかと筆者は考える。そのため、黄道婆は漢民族にとっては同胞であらなければならなかったとも筆者は推察する。そして説話の中で、黄道婆漢民族説とともに、上海・海南島を海路で結び、黄道婆を移動させた理由は、このような時代背景において、木綿紡績技術の改革が漢族内で発達したものとして、確立させるための説話であったのではないかとも推測するのである。

そして、蒙古族に支配されていた宋・元時代にあって交易陸路が蒙古族に独占されていた社会的状況下、漢民族の人々が海や河川の航路を見出し、その航路の中心的な港として開いたのが上海港である。上海に「黄道婆」という、漢民族の功労者を打ち立てることによって、彼ら民族の誇りとしたのではないかとも考えるのである。

また、筆者が採集した、いくつかある民間伝説のひとつには、彼女は海南島・黎族の出身であり、彼女が愛した人は血縁者でそれを嫌った黎族の首長は彼女を幽閉した。その後、釈放されたときにはすでに年老いて、出家（道教）するため、船に乗り、海を渡って上海に辿りついたとある。［姜銘　1994：63］他には、海南島で伝承されている説話で、幼い頃、貧困のため童養媳となり上海に売られ、嫁ぎ先の虐待に耐えられず、故郷の海南島へ帰り、織物の技術を習得し、優れた織物の作り手として、中国全土に名前が知れ渡り、広東・福建・江南一帯に紡績技術を教え広めたと言う説［高昌　蔡於良　1998：No.2　1～24］もある。

しかし海南島出生説には決定的な根拠となるような文献が少なく、また矛盾も多い。筆者自身は「幽閉説」について、長年幽閉されていたのであれば、どのように技術を習得したのか、年老いて海南島から上海に渡ったとすれば、言語・習慣問題上、どのように異郷の地で技術を伝えたのかといった矛盾が問題点として残るのである。また、後者の説では、移動に要する交通手段、また年月等の時間的問題から、この時代に広範囲にわたって、紡績技術を彼女の生存中にどのようにして教え広めることを可能にしたのか、という疑問も膨らむのである。

4−3　考察

中国において、木綿紡績の発達の経緯は紡績史上、重要な位置を占めているばかりでなく、近代史、手工業から機械工業への発展、中国における資本主義の発生と発展を研究する上で重要な意義があるものとして、位置付けられている。すでに何度も繰り返して述べてきたように、宋から元時代にかけて、中国では木綿紡績技術とその生産が急速に発達した時代である。木綿が中国全土に普及し始めた宋時代末期は、それまでの繊維素材であった、麻・葛・絹を布にするための技術や織具を、新しい繊維である木綿を布にするためには、従来の工具に改良を加える必要があったと考えられる。

黄道婆は、このように木綿紡績技術の発展にとって重要な時期に、当時、最も進んだ紡績技術をもった海南島の黎族から、その技術を学んだ人物として登場する。

しかし、宋時代末に方勺（*fangpiao*）によって書かれた『泊宅編（*bozhaibian*）』巻三の中に、海南島では、これより以前に織られた美しい布が製作されていたことが記述［王国全 1994：53］され、この当時、海南島黎族による優れた技術で作られた木綿織物は、中国本土の人々に、すでに広く知られていた。そのため、彼女は、技術・道具の移入、改良に加えて、黎族の考案した美しい織文様も中国本土に伝えたとされているのではないかと筆者は推測する。

5. おわりに

宋・元時代に松江でつくられた「烏泥涇被」は、江南・江北[7]の人々に広く受け入れられ、清時代後期には、松江で作られた「松江大布」は、南京で作られる「南京紫花布」と並び、木綿布の逸品とされていた。黄道婆が活躍したとされている松江は、宋時代末期には江南地方における一大産地として発展した場所である。黄道婆に集約される綿紡績上の貢献とされているものを整理すると以下の 4 点を挙げることができる。

1、手によって、ワタと種を分ける原始的な方法から「撹車」を用いることにより、半機械化をすすめ作業効率を大きくあげた。（写真 1・図 1）

2、竹製の弓に糸を張っただけの綿打ち用の工具を改良し、手指で綿弓を弾く綿打ちに比べて、労力や作業時間を省略できるようになった。（図 2）

3、以前は 1 本であった糸錘棒を 3 本に増やし糸紡ぎの能率をあげた。（写真 3・図 4）

4、綿織物での文織りを可能にした事から、平織りの綿布から「折枝・団鳳・棋局・字様」といった文様の布を織り出すことが可能になった。（図 5・6・7・8）

このような工芸技術の革新は、技術的に修練も必要であり、非常に困難の多かった紡績の状況を簡便にし、多くの人々が紡績にたずさわることができるようになった。また、その生産効率を大きく上げたばかりか、綿織物を実用と美しさを兼ね備えた工芸にした。

黄道婆の説話は、前述してきたように数多く存在するが、黄道婆という女性が実在したという確証はない。しかし、木綿織物技術が、江南地方の経済を豊かにし、また衣生活の改良といった、経済と生活の両面から豊かさを与えた。

数々の説話は、木綿の中興の祖である「黄道婆」を偉人とした。そして、江南の人々にとっては、「黄道婆」は民族の誇りを賭けて、同じ民族である漢民族としなければならなかったのではないかと筆者は考えるのである。

最後に、中国・江南地方に伝わる童謡を紹介する。

黄婆婆、黄婆婆、	拙訳：黄おばあさん、黄おばあさん、
教我纱、	糸の紡ぎ方を教えてよ
教我布、	布の織り方を教えてよ
两只筒子两匹布。	2 本の筒に 2 匹の布

［张家驹　1994：9］

謝辞：「黄道婆」を研究・調査するにあたって現地（中華人民共和国）においては、上海戯劇学院、戴平氏、楊振中氏、範和生氏。東華大学（元紡績大学）、洪凭氏。中国藍印花布館の久保まさ氏をはじめ、実にたくさんの方たちに多大な援助と協力をいただきました。ここに謹んで深謝いたします。

また、半年間の中国研修の機会を与えていただいた塚本学院・塚本邦彦理事長をはじめ、事務局の方々にもお礼を申し上げます。
そして大阪芸術大学の諸先生方、染織コース研究室の先生と副手の方々に深く感謝いたします。
尚、この報告を作成するにあたって、御指導いただいた井関和代教授に、厚くお礼を申し上げます。

参考文献

上海県文化局・上海県誌弁公室
1994 年　『黄道婆研究』　上海社会科学院出版社

田自秉
1985 年　『中国工芸美術史』　東方出版中心

中国藍印花布館　蔵
1995 年　『中国藍印花布』　北京工芸美術出版社

薛雁・吳微微　編集
1999 年　『中国絲綢図案集』　上海書店出版社

中国大百科全集　紡績編集委員会
1984 年　『中国大百科全集　紡績』中国大百科全集出版社

海南省民族宗教事務庁
1998 年　『海南旅游文化彩絵故事叢書　No.2』　海南出版社

辞海編集委員会
1999 年　『辞海』　上海辞書出版社

角山幸洋
1968 年　『日本染織発達史』　田畑書店

大阪芸術大学工芸学科染織研究室
1998 年　『大阪芸術大学所蔵品資料集木綿文化』　大阪芸術大学

香坂順一
1982 年　『現代中国語辞典』　光生館

村川堅太郎・江上波夫・山本達郎・林健太郎
1998 年　『世界史地図・年表（新版）』　山川出版社

帝国書院編集部
1999 年　『地歴高等地図　現代世界とその歴史的背景』帝国書院

脚注

1　童養媳：他家の女子をひきとって育て、息子の成長を待ち結婚させたこと。息子の嫁にするまで労働力とした。人身売買の一種。

2　輟耕録：輟耕録南村

3　吉　貝：木綿の白い布。白畳ともいう。

4　撹　車：軋車ともいう。

5　弄　堂：上海に見られる路地、横丁。北京では胡同

6　対　聯：紙や布、或いは木や竹に刻んだ対句。

7　江南・江北：長江以南、以北。
（長江下流の江蘇・安徽省、浙江省北部）